



## 遠藤周作の初期作品にみる人種問題の視点 - 「アデンまで」「コウリッジ館」を中心に -

著者	熊谷 雄基
雑誌名	国際文化研究
号	15
ページ	113-126
発行年	2009-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00120304">http://hdl.handle.net/10097/00120304</a>

# 遠藤周作の初期作品にみる人種問題の視点 ——「アデンまで」「コウリッジ館」を中心に——

熊 谷 雄 基

## 要旨

遠藤周作がフランス留学直後に発表した初期短編「アデンまで」や「コウリッジ館」には、白人の価値観に迎合する主人公ら有色人種の意識・行動が、避けられぬ破綻を導く様が描かれている。こうした作品では、自らの価値観を普遍化しようとする白人たちの自己中心性が告発されると同時に、白人中心主義的な価値観の相対化が志向されていた。その背景には、白人中心主義に絡めとられた自身のキリスト教理解を相対化しようとする作者遠藤自身の姿がある。人種問題の不条理を問う物語を書くことは、一人の日本人キリスト教徒という立場から、自分にとってのキリスト教を問い、同時にキリスト教の本質を問うという遠藤の文学理論の萌芽であった。

【キーワード：遠藤周作、留学体験、人種問題、白人中心主義、キリスト教観】

## 1. はじめに

遠藤周作（1923-1996）は、戦後初のフランスへの留学生として 1950 年に渡航するが、結核の発症により留学は約 2 年半で打ち切れ、1953 年に帰国する。帰国後、遠藤は評論活動続ける傍ら、本格的に小説の執筆を開始する。この時期の小説作品はいずれも短編であるが、「アデンまで」（1954）を皮切りに、芥川賞受賞作となった「白い人」（1955）、「コウリッジ館」（1955）、「黄色い人」（1955）などの作品が、相次いで発表されている。

留学という経験が遠藤の文学に何をもたらしたかを問う上で、こうした最初期の作品の分析が重要であることは言を俟たない。特に、主人公のフランス留学とその挫折が描かれる「アデンまで」と「コウリッジ館」の 2 作品は、注目すべきものであると思われる。しかしながら、従来の研究では、作品論は「白い人」と「黄色い人」に集中する傾向が見られ、遠藤の留学の意味を中心に考察する論考も、留学期とその前後に発表あるいは執筆された初期評論やエッセイ、日記等を主に利用するものが多い<sup>1</sup>。作品論としても「アデンま

で」についての論考はそれほど多くはなく<sup>2</sup>、「コウリッジ館」に至っては、管見では上総英郎<sup>3</sup>が「アデンまで」との主題の関連について言及している以外、詳細な分析はないようである。そのため、本稿では「アデンまで」と「コウリッジ館」の 2 作品を中心に上げ、それぞれの主題を相互に関連づけて論じることを試みたい。

上記の 2 作品には、主人公を含んだ異人種間の交流の中で生じる誤解や対立、人間関係の破綻といった問題が積極的に取り上げられ、そうした出来事の果てに主人公が周囲に対して募らせていく失望感が題材化されている。私見では、遠藤の留学の最大の成果の一つとは、人種問題に対する視座の獲得と、小説におけるその応用法の発見であるのだが、本稿では以下の第 2 節と第 3 節で、こうした点について先行研究と対比しながら詳しく論じる。その上で、第 4 節では、人種問題のモチーフを利用して作品を構成することが、遠藤自身の信仰の問題や文学観とどう関連しているのかを明らかにする。なお、テキストは『遠藤周作文学全集』（全 15 巻、新潮社、1999-2000 年）を使用した。

## 2. 異人種間の愛の挫折

短編「アデンまで」は、結核により留学の継続を断念した主人公の青年・チバが、マルセイユからアラビア半島の海港・アデンへと向かう貨物船に乗り込もうとする場面から始まる。チバを見送るため、チバと恋愛関係にある白人女性・マギイがパリからマルセイユまで同伴するのだが、放心するほど悲しむマギイに対してチバは何の感傷にも浸らない。ヨーロッパを去るという事実を淡々と受け止めるチバは、宿の戸口で最後にマギイの手を握った時も、その感触が白く乾いたものであることを、無感動に記憶するのみであった。

こうした両者の温度差がどのように生じたのかは、出港後のチバの回想の場面で徐々に明らかになる。2 人が親しくなったのは、パリの下宿でチバと隣室となったマギイが、フジヤマやサクラの国・日本にあこがれ、チバがその美しい「日本の幻影」（「アデンまで」『全集 6』p.11）を損ねないように、気を配ったからであった。一方マギイも、チバを守ろうと、南京での虐殺について日本人を悪く言う大学生たちに敢然と言い返す。「じゃ仏蘭西はなにをしたというのよ。北アフリカ<sup>アフリカ</sup>であたしたちが黒人を殺さなかったというの。あたしたちにはチバを裁く権利はないわ。」（同、p.12）「人間はみな同じよ（中略）黒人だって黄色人だって白人だって」（同、p.12）。マギイはやがてチバに思いを寄せるようになり、マギイの人間観に共感したチバは、その愛情を一旦は受け入れる。しかしチバにとって心境の変化をもたらす事件が続き、チバは、マギイの人間観も人種を超えた愛も、結局は幻想にすぎ

ないと結論づける。本節では、こうしたチバの心境の変化について、分析を試みる。

チバの回想には、異人種間の愛の成立の困難さを痛感させる事件が、二つ取り上げられている。一つ目は、マギイと初めて裸で抱き合った時のことである。チバは、鏡に映る自分たちの姿に決定的な不調和を見出す。マギイの真白な全裸の美しさに対して、チバの肌は生気のない暗黄色をおびて沈んでいた。チバは自身を「真白な<sup>はなびら</sup>葩にしがみついた黄土色の地虫」（同、p.13）と形容し、これ以降、マギイに対する劣等感にとらわれて、その愛情を素直に受け入れられなくなっていく。

こうした箇所には、肌の色は美醜の問題と関わっているという遠藤の見方が反映されている。実際、遠藤は留学中、自らの肌の色について白人の若者から「醜い」と陰で言われた経験があるという<sup>4</sup>。そうした体験に基づき、遠藤はエッセイで次のように記す。「有色人が醜いこと、そして野蛮であるという気持は多かれ、少なかれ、ほとんど一般の仏蘭西人が心に持っている感情ではないだろうか。（中略）そしてその場合、醜いとか、美しいとかは白人の容貌や体格を標準としているのである。（中略）もしアポロ像がギリシャではなく別の国、黒人の世界から生れたらどうだったろう。黒人は醜いという固定観念は生れただろうか。白という色が明晰や清純を表現するにたいし、黒という色は、（中略）何か悪魔的な非基督教的な暗いものを西洋人に連想させるのである（中略）。／人種的偏見は主としてこの白人標準主義から生れている。（中略）こうした人種的偏見を決して善しとみない人々の心理にさえも深く根ざしている」（『有色人種と白色人種』（1956）『全集 12』pp.212-213）。

つまり、遠藤の観点によれば、自分の肌を醜いと感じるチバの苦しみは、白人の容貌や体格に基づく美の基準に絡めとられ、白人に対して自らを卑下する結果となっていく黄色人の苦しみ<sup>5</sup>として理解できよう。また、作品の背景には、肌の色による差別という表面に表れた問題の背後に、思想や信仰のレベルにまで根を下ろした白人中心主義の存在を嗅ぎ取り、それを問題化しようとする意思もある<sup>6</sup>。すなわち、白人の信奉する形でのキリスト教のみを正統と見なし、それを普遍化することは、人種差別と同根の差別意識を正当化することに他ならないとする告発の姿勢である。しかしその点については第 4 節で詳しく論じることとし、ここでは肌の色の問題に焦点を絞って分析を進めていくこととしたい。

異人種間に愛は成立しないと感じ始めたチバに、追い打ちをかける二つ目の出来事が起こる。マギイが白人の友人たちの集まるパーティーの席でチバを婚約者として紹介すると、皆が動揺し、場がしらけてしまうという事件である。マギイは必死にチバをなだめ、一緒にタンゴを踊るのだが、チバはそこでも、周囲の視線が皮肉や非難、侮蔑に満ちているこ

とを感じて苦しむ。「黄色人が白人の娘をね」「ごらんなさいよ。あの男、いい気でだいて  
いるじゃないの」(「アデンまで」『全集 6』p.16)。周囲の視線に抗おうとマギイが体を寄せ  
るほど、チバは逆に疎外感に苛まれていく。マギイの思いが善意に基づく知りつつ、チ  
バはその愛情を拒否し、愛だけでは充分ではないと言ってマギイを責める。

チバがマギイを責めるのは、優越感の上に居直る白人の平等主義者と、マギイが重なっ  
て見えるからである。パーティーではある青年が、「ぼくは人種差別主義者じゃないんです。  
(中略) 印度支那やアフリカから来た友人を沢山もっていますしね」(同、p.17)「実際、君  
たちは、ぼく等と(中略) 顔、かたちはそんなに違ってはいませんよ」(同、p.17) とチバ  
に語りかけるが、チバは内心、お前は異人種の「友人」たちから婚約者を選びはしないだ  
ろうと反論し、そんな青年の言葉は憐憫か社交辞令にすぎないと断じる。そしてマギイの  
愛情もまた、慈悲や慈善の気持ちに支えられているのではないかと疑ってしまうのである。

相手が善意であるほど苛立ちが生じることを、遠藤はエッセイでさらに詳しく語ってい  
る。留学当時、有色人種の学生との親睦を目的としたリヨン大学の団体「国際学生、友の  
会」に参加することは、遠藤にはしばしば苦痛だったという。そこでの白人たちの振る舞  
いが、押しつけがましい友情やうぬぼれ、傲慢さを感じさせたからである。日本人は「ぼ  
くたちと同じように文明人だ」(「有色人種と白色人種」『全集 12』p.215) という白人学生  
の言葉が、結局「ぼくら中心」(同、p.215。傍点は原文通り。)の価値観から発せられてい  
ることに気づくと、そうした憐憫が耐え難くなり、むしろ憎まれたほうがよいとすら思え  
たという。大事なものは肌の色ではなく知性や精神であると白人たちが口にしても、多くの  
黒人が白人と同じ知性・教養を身に付け、自己の内面を白人の基準に合わせようと躍起に  
なっている現状を無視しているのだとすれば、それは富のある者が富など問題ではないと  
語るのと同じ意味で愚劣であると、遠藤は述べる。遠藤の視点では、こうした問題の根本  
とは、反人種主義を掲げる白人が「有色人種を白人として取り扱えばいいと考えている点」  
(同、p.215。傍点は原文通り。)であり、白人が憐憫や同情によってしか有色人種を尊重  
できないのは、彼らの内側にそうした自己中心性があるからなのだった。

「アデンまで」に話を戻すと、チバから見て、マギイの愛は、人種はみな同じという理  
屈に支えられた愛であり、しかもその信条そのものが白人中心主義的なのだとすれば、彼  
女は恋愛においても白人の論理に則って、自分の愛したいようにチバを愛しているにすぎ  
ない。苛立つチバは、こう言い放つ。「君は俺を愛することができる。君は白人だからな。  
しかし俺の黄色い苦しみは君をくるしめないじゃないか」(「アデンまで」『全集 6』p.18)。

遠藤は、エッセイの別の箇所にも次のようにも記している。「国際学生、友の会」で感じた違和感を突き詰めていくと、自身の本来の希望とは、「私を白人のようにではなく人間として取り扱ってもらいたいこと、そして黄色人として正当に交際してもらいたい」（「有色人種と白色人種」『全集 12』p.216）ということであった。翻って「アデンまで」のチバは、こうした願いがまったくかなえられない。白人のマギイがチバを愛するのは自由の範疇に属すると周囲から見なされる一方で、黄色人の自分にはマギイを愛する権利がないかのように見なされること、そしてそれに対するマギイの慰めの言葉も、往々にして、他の白人の慰めの言葉と同じ言い方で発せられるということが、彼には許せなかったのである。

そして後日、ついにマギイも一人の白人としての本音や深層心理を、ベッドでのぞかせることになる。情事のさなか、はじめて快感を知ったマギイは、突然眼を血走らせると、チバの首を絞め、「貴方は私の奴れいよ」（「アデンまで」『全集 6』p.21）と呟く。一方チバは、マギイに組み敷かれる瞬間に自分がおぼえる快楽は、黄色人としての自分を卑下する自虐感にすぎないと自己分析する。こうした事件は、マギイの愛の本質に対する疑いを確信に変えるには十分なものであっただろう。マルセイユ港でチバとの別離を受け入れられないマギイに対して、チバがまったく冷静である理由が、こうして読者に納得される。

チバは結局、白人中心の社会としてのヨーロッパにも、白人女性の愛にも、また人種を超えた愛が可能であると信じていたかつての自分自身にも失望したのである。健康も失われ、情熱も愛の可能性も見失った自分がヨーロッパを去ることは、白人中心主義との決別でもあった。しかもそれは、後ろ髪を引かれながらの離別ではない。すべてが破綻し、ヨーロッパは自分の住むべき空間でないという事実を突きつけられての離別である<sup>7</sup>。最後に握ったマギイの手の感触が白く乾いたものであるのは、マギイの存在自体が、チバにとってはもはや魅力も愛着も失われたヨーロッパの象徴だったからに他ならない。

### 3. 有色人種同士の対立

人種問題が中心的モチーフとされた初期作品としては、「アデンまで」の翌年に発表された短編「コウリッジ館」も典型的である。「ポーラン君、君にあてたこの手紙を、ぼくはどこにだして良いのかしりません。君がまだリヨンにいるのか、それとも、アフリカの故郷に帰られたのかも、しりません。もう二度と、君とぼくは、あのコウリッジ館の生活を除いて、出あうことはないでしょう。」（「コウリッジ館」『全集 6』p.81）と、黒人同窓生に宛てた主人公の手紙の文体で語られるこの小説は、黒人の登場人物が物語の核となっている

という点において、注目すべき作品である。日本人学生の「ぼく」と黒人学生・ポーランは、ともにフランスにおける外国人留学生として、互いに複雑な感情の交流を持つことになる。作品内の出来事自体は虚構であると思われるが、ポーランには実在のモデルがおり、リヨン滞在時に遠藤と同じ寄宿舎に住んでいた同名の黒人学生がそれであるようだ<sup>8</sup>。

下宿代を節約するために粗末なカトリック学生寮に引っ越してきた「ぼく」は、廊下で白人の寄宿生たちが「今度、黄色人<sup>ジョーンズ</sup>が入るんだってサ」「そうさ。便所が黄いろくなるぜ。来学期から」（同、p.81）と小声で話すのを耳にし、不快感を味わう。ようやく数人の白人学生と交流するようになってからも、「チバは俺たちとほとんど変らないからな。それに日本は文明国だから、ほかの黄色人とちがうさ」（同、p.85）という相手の言葉に、憐憫や同情の意識を垣間見て傷つけられる。一人の対等な人間として白人と付き合いたいという願望がかなえられず、白人学生たちを軽蔑し始めた頃、黒人学生のポーランが隣室に引っ越してくる。「ぼく」は、同じ有色人種として親近感を覚えるものの、白人との交流を独占したいという思いからポーランにぞんざいな態度をとり、自分が上位に立とうとする。ポーランも同様に「ぼく」を見下そうとする。ある日、白人の学生の財布が盗まれる事件が起き、疑われたのは「ぼく」とポーランであった。「ぼく」は、本当は白人の学生が別の学生の部屋に盗みに入ったのを目撃しており、犯人を知っていたのだが、余計な発言によって自分が疑われることを恐れ、真実を言えない。結局白人学生たちの間では犯人はポーランということになり、憤った彼らは外出中のポーランの部屋を荒々しく搜索する。「ぼく」は、戻ったポーランが無残に荒らされた部屋で悲しむさまを隣室でありありと感じとりながら、何もできずただ隣室の気配だけをうかがっていた。物語を要約すれば、このようになる。

「ぼく」とポーランとの関係の描き方について、この物語の特徴的な点を挙げれば、それは白人との関係をめぐって、両者の間に親近感と競争意識の二種類の感情が生まれるに至る、両者の心の動きを遠藤が鮮明にあぶりだしている点であろう。「ぼく」がポーランに親近感を抱くのは、白人から疎外される者同士という共通性を意識するからである。しかし、共通意識は競争意識をも生み出す。ポーランは初対面の「ぼく」に対して「幻滅とも安心ともつかぬ表情」（同、p.87）を浮かべた後、急に高圧的な態度に転じ、カサブランカはフランスの街と同じで地下鉄があるのだから、ターザン映画と同一視するなど「ぼく」に説教を始める。「ぼく」の方も「東京にだって地下鉄はあるさ」（同、p.88）と応じる。両者の間に生じた競争意識は、ここではどちらの出身国の工業化がより進んでいるか、どちらの方が白人社会に近いかという比較の議論の形で現れている。それが留学先のフランス

において、どちらがより白人社会に受け入れられるかを競う競争へとつながるのである。遠藤は主人公に、「ぼくと君とは、まるで白人という男を奪い合う二人のあさましい女のようでした」（同、p.89）と語らせ、相手を蹴落として自分だけが白人グループと同化しようとする「ぼく」の姿勢が、遠藤の観点では嫌悪されるべきものであったことを示している。

ポーランは物語の最後で、盗みを疑った白人学生たちによって部屋を荒らされ、暗闇の中で茫然自失する。そしてポーランとの競争をやめなかった「ぼく」も、物語の最後に咯血し、結核の発症が暗示される。遠藤は感傷的な語り口のこの物語を、主人公に過去の留学生生活を振り返らせる形で描いているが、それはおそらく、主人公に自らの行動を振り返って一つ一つ吟味させ、そこに遠藤の観点での罪を見出させるためであっただろう。主人公の手による書簡体の語りが、一種の告解の形式になっていることから、そのことがうかがわれる。この観点から解釈すれば、「ぼく」とポーランがともに物語の結末において破綻に直面していることは、罪に対する罰とみなすことができる。また、「コウリッジ館」の物語全体が、主人公が自ら罪を認めそれを告白する行為を通して、過去の罪の浄化と、彼が傷つけたポーランとの和解を密かに神に祈る物語としても読めるものとなるだろう。

ところで、黒人学生・ポーランが登場する初期作品は「コウリッジ館」のみではない。短編「異郷の友」（1959）においても、同じく主人公がフランス留学時の思い出を回想する場面で、パーティーの席で踊るポーランという名の黒人学生が描かれている。

曲がなりだすと、彼は手足を水車のように回転させながら奇声を発して飛び上がった。しゃがんだりした。それは決して彼の国の民族的な舞踊といえるものではなかった。よし民族的な舞踊としても彼はこの奇妙な踊りが白人の学生たちに与える滑稽感に気がつかぬ筈はなかった。気づいた上で彼はこうした舞踊をやり、肌色のちがった連中に追従していることを敏感に私は感じ取った。

だが私がその時、興味をもったのは、このポーランという学生の態度ではなかった。興味をもったのはこの彼を白人の連中にまじってやはり笑いを嚙みこらし、軽蔑した眼差しでながめている同じアフリカ出身の幾人かの学生たちの表情だった。ポーランが声をたてたり、跳ねまわったりするたびに彼等は仏蘭西人の学生たちの顔をチラッと眺め、声を立てて笑うべき所には声をたてて嘲笑をあびせていた。（中略）

（あれは留学生たちが陥る罠だ）

「異郷の友」『全集 6』 pp.344-345



ここで遠藤が描くのは、白人グループに気に入られるため、自ら笑いものになって愛嬌を振りまくポーランの姿と、白人とともにポーランを嘲笑することで、別な形で白人に取り入ろうとする他の黒人学生たちの姿である。そしてその双方に対して、主人公はそれが「畏」であると喝破している。「留学生」にはもちろん日本人学生も含意されていよう。自尊心や自文化の価値観を投げ捨ててまで白人社会に同化しようとする戦略をとることや、その過程に競争や優劣判断の観点を持ち込むことで誰かを蹴落とし否定することは、遠藤の観点では有色人種の陥る「畏」であり、一種の罪であったことがここからも読み取れる。

遠藤は、前述のエッセイの中で、「できるだけ白人のように見られようとする欲望も、(中略) 逆手をとって白人の可愛いネグロになろうとする方法も結局は同じ心理から生れたものである。(中略) その本質は自分の肌を忘れようとする、自分の醜さを意識しまいとする気持」(『有色人種と白色人種』『全集 12』p.218) であると指摘し、日本人もその例外ではないことを付け加えている。このような考えに基づき、遠藤が小説に描き出す物語とは、白人の価値観に迎合しそれに擦り寄ろうとする有色人種の意識・行動が、避けられぬ破綻へと向かって主人公たちを押し進めていくさまなのであった。遠藤はこうした背理法を用いて、白人中心主義に迎合しようとする有色人種の意識に警鐘を鳴らすのである。

前節で取り上げた短編「アデンまで」においても、黒人の登場人物の果たす役割は重要である。前節ではチバとマギイの関係に焦点を当てるために黒人の登場人物については論じなかったが、アデン行きの貨物船でマルセイユを出航した後、チバにとって同室の乗船者となった人物が、病で寝たきりの黒人女性であった。本節では、遠藤の初期作品における有色人種同士の対立の例として、この黒人女性とチバとの関係についても分析したい。

アデンへの航海において、チバが乗り込んだのは、薄暗い上に耐えがたいほど暑い、船艙の四等船室である。そこでは貨物が山積みとなる中、太った黒人の女が熱にうかされて横たわっている。やがて彼女は船酔いにも苦しむが、白人船員は彼女を放置し、食事を運ぶなどの世話をするのは同室のチバのみである。ここで遠藤自身の留学体験と重ね合わせると、この黒人女性は、遠藤にとっては他者ではないことがわかる。横浜からマルセイユへと向かう渡仏の船旅で、遠藤たち日本人留学生は、四等船室でアフリカ出身の黒人兵と同船したからであり、特に遠藤は、船酔いに苦しむ中、黒人兵たちの介護を受けていたからである。横浜からサイゴンまでの船旅を共にする中で、両者が次第に心を通わせる関係になっていったことは、遠藤のエッセイ「赤ゲットの佛蘭西旅行」(1951-1952) に詳しい。

実体験においては、遠藤と黒人兵たちは、不便な四等船室で共同生活を行うなか、互い

に名前を覚え、欠点はあっても憎めない人柄を感じ合うようになっていったようである。特に黒人兵の一人であるカニイは遠藤に、「隣人とは仲良くせよ」と何度も語り、言行一致の態度を見せたという。そうした交流がきっかけとなり、遠藤は、黒人兵たちが下船した後も、寄港地で次々に乗り込んでくる外国人たちとできる限り交流を持とうとし、船艙生活を通して共感的関係を作り上げる過程で、それまで様々な民族に対して持っていた偏見が自身の中で解消していくという体験をする<sup>9</sup>。しかし、そうした実体験とは対照的に、「アデンまで」にみられるチバと黒人女性の交流は、両者の悲観に満ちた痛々しいものである。

黒人女性はチバと言葉を交わさず、食事にも手をつけず横たわっている。その足指の上を油虫が這いまわる。熱のにおいの充満したその体の前で、チバは、「俺は真からその肌の色が醜いと思う。黒色は醜い。そして黄濁した色はさらに憐れである。(中略)如何に口惜しくても、肉体という点では永久に俺や黒人は、(中略)劣等感を忘れることはできぬ」(「アデンまで」『全集 6』p.14)と述懐する。つまり、チバが黒人女性に食事を運ぶのは、単にそれをする者が他にいないからであり、親切心や憐憫からではない。そして、横たわる女性の、醜く映るその姿の中に、チバは有色人種としての自分自身の憐れさを見るのである。

女性の症状が悪化したところで、ようやく白人船医と修道女が診察にやってくる。しかしそれも女性が望んだものではなく、伝染病の広がりをおそれた船医の判断であった。「このままにしてくださえ。(中略)これから、このままで寝ていたいだ」(同、p.18)と駄々をこねる黒人女性に対し、高圧的な船医は何度も平手打ちを食らわす。そして女性のための薬をチバに渡すと、口から泡を吹いた女性を残して、修道女と共に立ち去ってしまう。

遠藤のエッセイと照らし合わせると、「アデンまで」のこうした場面には、宗主国と植民地の関係も投影されていることがわかる。自身の渡仏時、遠藤は白人の船員から、「四等の奴は客じゃないぜ。船はお前たち黄色<sup>サール・ジョンヌ</sup>人や黒人を憐れんで乗せているんだ」(「有色人種と白色人種」『全集 12』p.210)と言われ、船艙の四等船室が一種の植民地であることを実感したという。また、サイゴンやコロombo、ジブチなどの寄港地に上陸するたび、被支配階層に置かれた先住民族の貧困のありさまと、白人の支配階層の裕福さとの格差から遠藤は目をそらすことができず、「そうした植民地政策、一民族のみが悦楽をむさぼり、他民族は彼らの下で悲惨な生活にぼんやりしている」(「赤ゲットの佛蘭西旅行」『ルーアンの丘』p.31)ことの不合理に憤りをおぼえる。さらに、留学中に耳にした白人たちの次のような言葉が、自分には詭弁としか思えなかったとも書き留めている。「だが、もし我々があそこに行かなければ、そのベトナム女はもっと悲惨な状態にあったのだよ。文明も知らず、病院も薬も

ない状態にね」(「有色人種と白色人種」『全集 12』p.211)。

船医から渡された薬瓶を手にしなが、チバはフランス生活で目撃した、白人の黒人に対する振る舞いの不条理を思い出し、しかし結局黒は罪の色なのだから、黒人は諦めるほかないのだと結論を出す。けれども、そのように黒人を突き放したチバはまた、次の疑問に駆られる。すなわち、黄色もまた黒と同様に罪の色であり、永遠の罰と諦めを運命付けられた色なのだろうかという疑問である。そのとき、チバの脳裏にマギイの声が響き渡る。

「貴方は私の奴隷いよ」(「アデンまで」『全集 6』p.21)。反射的にチバは、手をあげて病人の顔を何度も打ちつける。「薬を飲むんだ」(同、p.21)。

この場面で、黒人女性がなぜ急に憎らしく思えたのか自分にはわからなかったとチバは述懐しているが、文脈から判断して、チバが自分を含めた黄色人を、黒人と同じと認めたくなかったことは明らかであろう。そして黒人と自分が違うということを示すためには、白人の論理に従う他なかったのである<sup>10</sup>。それはチバにとって、ヨーロッパへの再度の接近であり、破綻への回帰であった。「打ちながら、俺は目の渇きを感じた」(同、p.22)。港でチバがマギイの手を乾いたものと感じていたことは既に指摘したが、黒人女性を眼前にして、自らの立場を守るため白人の論理に近づく他ないチバは、この場面で同情も涙も乾き、決別したはずの白人・マギイの手の感触と同化してしまっているとも読める。さらに、前述の通り、「アデンまで」の黒人女性は、遠藤にとって他者ではなく、自己の投影でもある。チバもまた作者の投影であるとみなせば、ここで強迫観念に駆られたチバが女性を何度も打つことは、白人の価値観に絡めとられた末の、一種の自傷行為とも見なせるだろう。

「アデンまで」の物語はその後、黒人女性が下級船員によって強制的に運び出され、隔離室で衰弱死するという形で展開する。物語の最後の場面は、黒人女性の遺体が、水葬と称して海に捨てられる場面である。「赤ゲットの佛蘭西旅行」に記された遠藤の渡仏の実体験と対比するなら、チバや白人たちの行為は、「隣人とは仲良くせよ」という黒人兵の教えのまさに対極であるといえよう。こうした点からも、主人公らの破綻を描くことを通して、その裏側にあるメッセージを浮かび上がらせようとする遠藤の意図を見ることができる。

#### 4. 信仰の問題との接点

「アデンまで」は、表面的には登場人物たちの人生の破綻を描いた作品である。しかし、宗教的な観点から見た場合、彼らに何の救いの道筋も与えられていないわけではない。たとえば、黒人女性の水葬の直前、チバは上空に輝く金色の一線を見る。チバ自身はその意

味を自覚していないが、武田秀美によれば、それは救いが皆無に見えたこの作品世界にも、主人公にはまだ見えていない神が内在していることを暗示するものであるという。また、海は基督教の世界観では神の被造物であり、女性がその海に葬られることで遠藤は彼女への救いを暗示したとの解釈が可能であるという。つまり武田の分析では、遠藤の描いた黒人女性は、人種問題の犠牲者ではあるが世界からの疎外者ではない。むしろ遠藤の意図は、なぜその黒人女性が犠牲にならねばならなかったかを読者に問い、人種問題の不合理を実感させることにあった<sup>11</sup>。この観点から言えば、「コウリッジ館」と「異郷の友」における黒人学生・ポーランや、両作品の主人公たちが読者に対して担わされた役割も、同様のものであったと言えよう。前述した通り、告解に似せた書簡体の語りで「コウリッジ館」を執筆した遠藤のねらいは、主人公に過去を振り返らせ、自分と隣人に破綻をもたらした罪の源泉を見出させることにあったと見ることができるからである。

ここで重要な点は、「アデンまで」においても「コウリッジ館」においても、主人公たちが自らの人生の破綻を回避したり内面の罪を認めたりするためには、白人中心主義的な価値観をそれぞれが自覚的に相対化し、乗り越えねばならないという仕組みになっている点である。たとえば「アデンまで」の末尾、黒人女性の水葬の場面を見てみよう。

修道女の読むそれら白人の祈祷、俺がヨーロッパでたえまなく聞きつづけた人間の働  
哭と祈りとは、もはや俺の耳には乾いた意味のない音としか聞えなかった。今の俺は死  
んだ黒人の女がそれら白い世界とはもう無縁であること、死の後にも裁きも喜びも苦し  
みもないこの大いなる砂漠と海との一点となることを知っていた。

「アデンまで」『全集 6』p.24

前述の武田の指摘にもあるように、チバは少なくとも「アデンまで」の物語の中では、黒人女性の死を包み込む神の恩寵を見出してはいない。しかし遠藤の文体は、そのチバにも、この段階でわかっていることがあることを伝えている。それは、黒人女性が死によって白人たちの「白い世界」と絶縁し、「大いなる砂漠と海」の一部となっていくこと、また、そうなった後には、「白い世界」の支配がもう彼女には行き届かないということである。チバはこの物語の中では明確にクリスチャンとしては描かれておらず、したがって恩寵の問題は、チバ自身の問いにおいては重視されてはいない。ここでむしろ重要なことは、「白い世界」が無限で永久の真理ではないことに、チバが気づき始めているという点であろう。

たしかに、チバは留學生活の破綻やマギイとの恋愛の挫折の果てに疲弊し、人間の悲しみにも祈りにも無感動になっている。しかし、「白人たちのすることは、どんなことでも善であり、神聖なのだ」（同、p.21）と有色人種を突き放し、自らの境遇を変えられぬ運命として悲観したかつてのチバは、この場面には存在しない。つまり、「アデンまで」の末尾は、かつては唯一の真理とみえた「白い世界」の外部に別の真理が存在することを示唆し、主人公がそうしたビジョンを獲得していく過程を示すものとなっている。

「コウリッジ館」にも、主人公が自らの行為を悔いていると解釈できる場面が存在するので、ここで触れておきたい。黒人のポーランが寄宿舎に住むことが決まると、白人学生は皆で彼を無視しようと決める。主人公のもとにも、白人のアンドレが懐柔にやってくる。

「お前とはつき合うが、今度来る黒人とは手も握らない」（「コウリッジ館」『全集 6』p.86）と言って手を差し出すアンドレに対し、主人公は息をつめて、その手を握る。ポーラン宛ての手紙の文体で過去を回想しつつ語る主人公は、そのときの握手について、「ぼくは裏切りの行為を果しました」（同、p.86）と、罪を告白するのである。この場面は、ポーランが後に盗みを疑われた際に、主人公が彼の無実を証言しなかったことの布石ともなっている。

コウリッジ館はカトリック学生寮であり、隣人を虐げる白人たちの行為は、本来のキリスト教倫理からみて責められるべきものである。しかしこうした振る舞いは寮内に蔓延しており<sup>12</sup>、白人同士の間ですら、窃盗を禁じた戒律が履行されていない。主人公もまた、白人たちに抵抗しないことで、結果的にはポーランを陥れる陰謀に加担してしまう。この作品においても主人公がクリスチャンかどうかは明示されないが、いずれであるとしても、主人公が白人学生たちの信仰の空疎さや墮落に失望したという事実は変わらないだろう。そして、喀血という罰を受け入れ、過去の過ちを悔いて許しを求める瞬間、主人公は本来の信仰を取り戻しているとみる解釈も可能である。あるいは主人公がクリスチャンでないとしても、墮落した白人学生よりはキリスト教倫理を体現しているとみることができる。

このように見れば、「アデンまで」と「コウリッジ館」の2作品は、少なくとも有色人種にとって、白人の世界が安住の地ではないことを示す物語であることがわかる。そして、その世界観が有色人種に死と破綻しかもたらさないのであれば、ひとは積極的にその外部へと退去し、価値を相対化せざるを得ないことが両作品には描かれていることになるだろう。それは同時に、白人の世界が絶対的空間ではなく、他の世界観・価値観と補完しあって初めて存在しうる意味空間であるという見方を、肯定するものともなっている。

特定の信仰を持たない者の立場からみれば、白人の世界観も黄色人や黒人の世界観もそ

れぞれに相対的であるという見方を受け入れることは、特に困難ではあるまい。しかし遠藤の場合は、フランス留学に自己の信仰の確立を賭けていた。日本で得られなかった信仰の実感を、フランス留学で得たいと強く期待していたのである。そのためには、フランスにおいてカトリックの世界観に身を浸すことが、とりわけ重要であると感じられていた<sup>13</sup>。しかし、遠藤が留学において見出したものは、キリスト教の社会や世界観の内部にも是正すべき問題が山積しているという事実であり、人種問題もまたその一つであった<sup>14</sup>。自らもこの問題の中に身を置く当事者として、遠藤は目をそらすことができなかったのである。

白人の世界に生じる社会問題を批判し、白人の世界観を批判することは、結局はキリスト教世界の矛盾をつく作業と重なることになる。しかし、自分を信仰へと導いた母親の世界から離れることを考えられなかった遠藤にとっては、そうしたキリスト教批判が自身の信仰を揺らがせるとしても、そこで信仰自体を諦めるという選択肢はありえなかった<sup>15</sup>。そこで遠藤は、自らの立ち位置を定めようとする。すなわち、一人の日本人キリスト教徒という立場を措定し、そこから白人の手によるキリスト教を批判すると同時に、自分にとってのキリスト教とは何かを考えるという方法論を試み始めるのである。人種問題の不条理について問う物語を書くことは、こうした遠藤の格闘の一過程とみなしうるものであり、白人の世界観に自己を同一化しないかぎりキリスト教信仰は確立できないというそれまでの思い込みから、自己を解放するための手段であったといえるだろう。

もちろん、遠藤は有色人種の世界観こそ真のキリスト教の世界に通ずると居直ったわけではない。キリスト教とは何であるかについて答えを性急に求めるのではなく、有色人種が白人の世界観に自己を同一化しようと努力してもそこには破綻しか生まれないのと同じ意味で、自己の感性を放棄する形で日本人がヨーロッパ式のキリスト教を受け入れても、それが真の信仰かどうかはわからないという態度を選ぶのである。「アデンまで」は、航海の目的地に曖昧な要素をあえて残しながら<sup>16</sup>、一人の日本人青年が、自分を精神的な袋小路へと追い込んだヨーロッパでの生活を打ち切り、不本意ではあっても、さしあたりヨーロッパを去る決意をするという物語である。そこでチバは、物理的な面のみならず精神面においても、ヨーロッパを離れ、一人の黄色人としての自己を取り戻す旅を始めようとしている。たしかにそれは先の見えない困難な旅であるのだが、そこには、日本人としての自分の感性を再度受け入れ、同時にキリスト教の信仰とは何であるかについて自らの手で考えようとする遠藤自身の姿勢が投影されていると解すべきだろう<sup>17</sup>。遠藤にとって文学とは、このような意味で自己の信仰のあり方を模索するための試みに他ならなかった。そしてそ

ここでは、キリスト教にヨーロッパ式、あるいは日本式という区分がありうるのかという問題も含めて、キリスト教とは何であるかという根本的な問題が問い直されるのである。

また、さらに付け加えるなら、遠藤の文学は単なる自己確立や信仰の獲得手段に留まるものでもありえなかった。遠藤にはたえず、自身の文学の社会的使命を問う意識もあったからである。遠藤は留学期のエッセイにおいて、渡仏の船旅の際に目にした様々な植民地の現状を思い浮かべながら、次のように記している。「この地上の不幸を、今日カトリック者が見捨てておくことは、怠惰であり、むしろ怠惰以上に悪である」（『赤ゲットの佛蘭西旅行』『ルーアンの丘』p.98）。こうした記述は、カトリックの信仰を持つことが、遠藤にとっては地上の不幸を決して見捨てないことと深く関わっていたことを伝えている。このような角度から思索する遠藤には、留学前の評論で取り上げたフランスの思想家シャルル・ペギイ (Charles Péguy 1873-1914) のことが改めて意識されているとみて間違いあるまい。ペギイは後にカトリックに改宗した社会主義思想家であるが、遠藤はペギイに共感を寄せる文脈で次のように語っている。「民衆は悲惨である。それは単に貧困だけではなく、すべての希望を失った絶望の悲惨である。此の悲惨は基督教的な悪の意味なのだ。此の民衆の悲惨に対して、人は、それを同情するだけでは事たりぬ。人々はすべて此の悲惨に対して共犯者である。すべての民衆の悲惨に対し個々の人間は魂の絶対責任がある。」（「シャルル・ペギイの場合」(1948)『全集 12』pp.60-61)「若し、民衆の九十九人が救われるとも、一人がその悲惨に留まる事は、ペギイには絶対に許せなかった。すべてが救われねばならぬ。九十九人だけではなく、百人の<sup>ことごと</sup>悉くが救われねばならぬ。」(同、p.61)

こうした点を踏まえれば、遠藤にとっては、差別待遇を受ける有色人種や植民地の人々を見捨てることが、カトリックの信仰をもつ上でも、文学を志す上でも許されないこととして意識されていたことがわかる。ペギイに倣うならば、「民衆の悲惨」に対し、遠藤は責任を負わねばならないからである。また、こうした形で「民衆の悲惨」と自己を結びつけることで、遠藤にとって信仰と文学とは、個を超える問題となっていく。自己を確立し信仰を確固たるものとするために、遠藤自身がまず文学者たることを必要とするのであるが、それと同時に、自己の信仰と一体となった文学はまた、「民衆の悲惨」と結ばれ、問題が地上から消え去るまで、その解決に寄与しつづけねばならないと見なされていた。こうした点からも、自己のキリスト教信仰が白人の価値観と合致するかどうかという問題が、留学期の遠藤の内部で、二次的な問題へと格下げされることになった背景が理解できるだろう。

## 5. 結論

本稿の冒頭で、遠藤の留学の最大の成果の一つとは、人種問題に対する視座の獲得と、小説におけるその応用法の発見であると書いた。遠藤自身の信仰の問題や文学観が、遠藤に人種問題への直視を要請したことは既に述べた通りであるが、留学直後に発表された遠藤の初期小説、特に本論で取り上げた「アデンまで」と「コウリッジ館」に顕著な点は、人種問題のモチーフを利用して作品を構成するという遠藤の姿勢が、留学体験を経た遠藤自身のキリスト教観の変化ないし広がりに対応しているという点である。物語の登場人物が白人中心主義からの精神の開放を求めるとき、作者である遠藤自身もまた、白人中心主義という限定的視点に絡めとられたキリスト教理解から、脱却を図ろうともがいていた。そしてそうした格闘が、次の段階の問いへと遠藤を進めていくのである。

本稿で中心的に取り上げた2作品と同時期の短編である「白い人」(1955)や「黄色い人」(1955)については、稿をあらためて論ずるが、これらの作品においても、遠藤は異人種間・異文化間に生じる問題を物語に取り入れながら、苦境の中でキリスト教的生を実践するとはどのようなことかという、より根本的な問題を問うている。そこでは白人の司祭や修道士が中心的人物として描かれるのだが、彼らは物語を通して信仰上の苦境へと追い込まれ、その中で、聖職者の望ましい行為とは何であるかについて、究極的な選択を迫られる。そのような物語を生み出すことを通して、遠藤は白人中心主義的なキリスト教理解にさらに疑問符を投げかけていくことになるのだが、そうした遠藤の問いの性質を理解する上でも、本稿で取り上げた人種問題の視点は、不可欠の前提となるといえよう。

## 注

- <sup>1</sup> 代表的なものとして、笠井秋生「フランス留学：小説家修行」『遠藤周作論』（双文社出版、1987年、pp.27-52）、上総英郎「非情なる凝視：初期評論」『遠藤周作論』（春秋社、1987年、pp.11-26）、武田友寿「文学者と留学体験」『遠藤周作の世界』（講談社、1971年、pp.79-95）などがある。
- <sup>2</sup> 李英和「遠藤周作『アデンまで』論：留学体験と疎外されるという絶望」『日本語と日本文学』（筑波大学国語国文学会、45号、2007年、pp.50-66）、笠井秋生「最初の小説『アデンまで』」『遠藤周作論』（双文社出版、1987年、pp.53-68）、川島秀一「小説家遠藤周作の誕生」『遠藤周作：＜和解＞の物語』（和泉書院、2000年、pp.3-15）、佐藤泰正「アデンまで：その作家的出発」『遠藤周作と椎名麟三』（翰林書房、1994年、pp.15-21）、武田秀美「『アデンまで』二つの視点」『作品論遠



藤周作』(笠井秋生他編、双文社出版、2000 年、pp.9-24) など。

- 3 上総英郎「初期小説の世界：『白い人』『黄色い人』まで」『遠藤周作論』(春秋社、1987 年、pp.27-57)
- 4 「黄色人は黒人のように醜いな」／それから彼らはニュースでみた朝鮮事変のことを論じだした。  
(中略)／「兎に角、彼らは野<sup>ソウバージュ</sup> 蛮 だよ」(「有色人種と白色人種」(1956)『全集 12』p.212)
- 5 李英和は、エドワード・サイードのオリエンタリズムの言説を利用して、本稿と同様の見解を導いている。主人公は、白人中心主義とも呼びうるヨーロッパのオリエンタリズムの眼差しと、自己に対するオリエンタリズム的な眼差しによる二重の他者化を経験し、白人の価値観を内面化してさらに自分を卑下していくと分析されている。(李英和「遠藤周作『アデンまで』論：留学体験と疎外されるという絶望」『日本語と日本文学』、筑波大学国語国文学会、45 号、2007 年、pp.50-66)
- 6 先行研究では、たとえば笠井秋生が、チバがマギイに対して抱く人種の劣等感、作者である遠藤がキリスト教に対して抱く距離感を意味するものであると指摘している(笠井秋生「最初の小説『アデンまで』」『遠藤周作論』、双文社出版、1987 年、p.62)。笠井はここで遠藤が距離感を感じる対象を「キリスト教」と一般化しているが、私見では、この作品で遠藤が意識的に問題化したかったものは、白人の信奉するキリスト教であり、白人の信仰のあり方である。
- 7 李英和(注 5 を参照)は、チバはヨーロッパの知の欺瞞を見抜き、失望してヨーロッパを飛び出したと解釈している。しかしより正確に言えば、チバは自ら積極的にヨーロッパを離れたというよりも、結核と熱意の喪失によって帰国を余儀なくされたとみるべきであろう。
- 8 日記に、リヨン大学近くの「クラリッジ寮」に引っ越したことが記録されている(「作家の日記」『全集 15』p.44)。「門番夫婦の他は黒人学生のポーランと私しかいない」との記述もある。(同、p.62)
- 9 遠藤周作「赤ゲットの佛蘭西旅行」『ルーアンの丘』、PHP 研究所、1998 年、pp.17-23
- 10 武田秀美はこの場面について、チバは同じ有色人の黒人女の中に、白人の差別に自虐感をもって接している自己の姿を重ねて見、そのような自己と黒人女のみじめさに憎しみと怒りが湧き起こって、黒人女の顔を打ったのではないかと別の角度から分析している。(武田秀美『「アデンまで」二つの視点』『作品論遠藤周作』、笠井秋生他編、双文社出版、2000 年、pp.12-14)
- 11 武田秀美「『アデンまで』二つの視点」『作品論遠藤周作』、双文社出版、2000 年、pp.9-24
- 12 上総英郎は、「コウリッジ館」の人間関係について次のように分析する。カトリックの伝統の中で正統性を誇る白人寄宿生に対し、有色人種はここでは異端の新参と見なされる。しかしながら、実際には白人たちの心は差別意識に満ちており、彼らの世界が腐敗しているさまを、作者遠藤は批判的に描いているという。(上総英郎「初期小説の世界」『遠藤周作論』、春秋社、1987 年、p.41)
- 13 たとえば、渡仏してすぐの日記(1950 年 7 月 8 日、9 日)には、ついに自分はカトリックの社会の

中に身を置くことができたという遠藤の感慨が書き留められている。「教会には、中世の、又ルネッサンスの、更に 19 世紀の建築と像とが混合している。これは欧州におけるカトリシズムの一象徴なのだ。これがカトリシズムなのである。」（「作家の日記」『全集 15』 p.20）

- 14 「悲しみが疼いてやまなかった。飢え、悲惨、苦悩は日本だけではなかった。（中略）不幸のかげには（中略）不正なものがひそんでいる。」（「赤ゲットの佛蘭西旅行」『ルーアンの丘』 p.34）

- 15 遠藤の受洗は 1935 年、12 歳の時のことであるが、それは離婚した母親を喜ばせるための無自覚なものであった。受洗後、遠藤は教会での教えに実感を持てないことに悩む。18 歳時には教会と母から離れ、父との同居を選ぶ。しかし信仰を棄てることは母親との絆を棄てることでもあり、母を棄てた父親と自己を同一化することでもあることに苦しんだ遠藤は、母親との絆を回復すべく、翌年には父親の命じた医学部を受験せずに、慶応大学文学部の予科へと進学して再度カトリックに戻っている。（山根道公『遠藤周作：その人生と『沈黙』の真実』、朝文社、2005 年、pp.31-81 を参照。）

- 16 チバの目的地の曖昧さは複数の論者が指摘しているが、紙幅の都合により最も代表的な笠井秋生の例を挙げる。「アデンまで」は、主人公のヨーロッパとの決別が描かれていることから、一見すると作者である遠藤自身のキリスト教への決別を表明した作品であるかに見える。しかし、キリスト教への決別を意味する作品であるなら、主人公は素直に日本へ帰るはずである。チバの行き先が曖昧にされることによって、ヨーロッパから距離を置きつつ、かといってキリスト教を決然と捨てることもできない遠藤の立場が象徴されることになる。（笠井秋生、前掲論文、pp.65-66）

- 17 チバは紅海を南下する船から砂漠を眺め、そこに一頭の駱駝の姿を見出す。「歴史もない、時間もない、動きもない、人間の営みを全く拒んだ無感動な砂のなかを一匹の駱駝が地平線に向かって歩いている光景、それはなぜか知らぬが、俺にはたまらない郷愁をおこさせる。」（「アデンまで」『全集 6』 p.23）この箇所をどう解釈するかが、チバの、さらには遠藤自身の立ち居地の理解として重要であろう。多少解釈の幅はあるが、主な先行研究では、駱駝がチバや作者遠藤を象徴するという点において見解が一致しつつある。たとえば兼子盾夫は上記の箇所について、独善的な西欧中心のキリスト教文明から解放され、東洋という懐かしいが、同時に西欧的な基準の通用しない異質の文明に回歸していく遠藤自身の当惑とも気負いともいうべきものが表れていると分析する（兼子盾夫「遠藤文学における象徴と暗喩の色彩論(1)：「白」と「黄色」を中心に」『横浜女子短期大学紀要』 19 号、2004 年、pp.93-111）。笠井秋生もまた、駱駝は日本という風土の中でカトリック作家として歩もうとする遠藤自身の象徴であると解釈する（笠井秋生、前掲論文、pp.63-64）。武田秀美は、チバは無意識のうちに歴史や時間を超越した永遠の空間を地平線の向こうに感じており、砂漠の背後にある神の存在と関わっているとみる（武田秀美、前掲論文、pp.19-20）。